

育児期にある成人女性が選択してきた各ライフコースの心理的特徴と 主観的幸福感との関連

GH091009 : 宮 内 七 菜

指導教員 : 若本純子准教授

問題

現代の成人女性は、ライフコースを自分自身で自由に選択できるようになり、学生生活の終わりと同時に各ライフ・イベントにおいて、選択を求められる。特に女性は結婚・出産というライフ・イベントの際に、仕事か家庭かという男性とは異なる選択を求められる。さらに出産の場合、女性はこれまでの日常生活が制限されたり、仕事を辞める選択を余儀なくされたりなどの挫折を伴うライフ・イベントにもなりうる(中西, 1995)。そして現代の成人女性たちは、「家庭か仕事か」という葛藤か、「家庭も仕事も」という多重役割をおのずと抱えるようになる(若本, 2008)。

そこで本研究では、成人女性のライフコースを、女性たちの選択の結果として捉え、それぞれのライフ・イベントに際し、どのように選択を行い、現在その選択をどのように感じているのかということを含めて検討する。

目的

目的1 育児期にある成人女性が選択を求められるポイントを踏まえて、ライフコースを抽出し、そのタイプを分類する。さらに、それぞれのライフコースにおける心理的特徴を明らかにする。

目的2 育児期にある成人女性の主観的幸福感をライフコース間で比較し、ライフコースと主観的幸福感との関連を検討する。

目的3 主観的幸福感に影響を与える要因の更なる検討として、学生時代に想像していたライフコースと実際のライフコースとの一致・不一致、そして不一致だった選択に注目した検討を行う。

方法

対象者 鹿児島県のある地域の保育園・幼稚園に通う乳幼児の母親379名

調査期間 2010年9月から2010年10月

データの配布・回収方法 質問紙法にて実施。保育園・幼稚園に電話にて依頼し、了承を頂いた保育園・幼稚園の母親を対象とした。

配布・回収方法は、保育園・幼稚園に筆者が質問紙を持参した場合、園の先生が配布・回収後に

筆者が再度取りに伺った。質問紙を郵送した場合は、園で配布・回収後まとめて郵送の場合と、母親が個別に郵送の場合があった。

倫理的配慮 インフォームドコンセントの口頭と書面での実施と、回収の際、個別に質問紙を封筒に入れて回収し、個人情報への配慮を行った。

調査項目

フェイスシート項目 年齢、離婚・死別経験の有無と経験をした年齢、最終学歴、仕事の有無と就労形態、同居家族、夫婦関係・経済状況などに関する満足度について4件法で回答を求めた。

主観的幸福感 伊藤・相良・池田・川浦(2003)による主観的幸福感尺度を使用し、4件法で回答を求めた。

ライフコース 実際のライフコースは、卒業後のライフコースについて、5つのポイント(I : 就職するかどうか, II : 結婚するかどうか, III : 仕事か家庭か, IV : 仕事か家庭(子ども)か, V : 再就職するかどうか)を設定し、フローチャートにしてどの選択を行ったのか、フローチャートをなぞる形で回答を求めた。思い描いていたライフコースについても同様にフローチャートをなぞる形で回答を求めた。

また、実際のライフコースについては、その選択をどの程度望んでいたかということと、現在その選択にどの程度満足しているかということそれぞれ4件法で尋ねた。

結果と考察

分析対象者 回収数は287部(回収率75.73%)。そのうち、父親・祖母が記入していたデータを除いた282名のデータを分析対象とした。平均年齢は34.76歳(SD : 4.96)であった。

因子分析 主観的幸福感尺度15項目のうち、伊藤ら(2003)の先行研究において多くの日本人にとって馴染みがあまりないとされていた3項目を本研究においても削除し、因子分析を行った。その結果、「対処能力への自信」「満足感」「達成感」の3因子を抽出した。

続いて、主成分分析を行い、一因子性を確認し、全項目により「主観的幸福感得点」を算出した。

各ライフコースの心理的特徴の検討

目的1に沿ってライフコースを分類し、各ライフコースの心理的特徴について相関分析を用いて検討した。

今回、全体で11のライフコースを抽出したが、サンプル数が少なかった6つのライフコースを除外し、5つのライフコースを今後の分析対象とした。それぞれのライフコースの心理的特徴を示す。

ライフコースⅠ(就業継続コース、N=58)においては生活満足度と夫婦関係や仕事、経済状況への満足度と正の相関を示し、このことから、先行研究(e.g., 荒牧・無藤, 2008)と同様、働いている女性は幸福感や満足度が高いということが示された。

また、最終学歴も経済状況満足度や生活への満足度と正の相関を示し、最終学歴が高い人は経済状況や生活への満足度も高く、最終学歴が低い人は経済状況や生活への満足度も低いということから、このライフコースを選択してきた人たちの間に格差があることを示唆する結果となった。

ライフコースⅡ(出産退職→再就職コース、N=30)では、仕事満足度と夫婦関係、母親としての満足度が正の相関を示し、ここでも就業女性の幸福感の高さが示されたと考えられる。

ライフコースⅢ(出産退職→専業主婦コース、N=17)では、母親としての満足度が、選択Ⅴ(出産後働くかどうか)での働かない選択に対する満足度と正の相関を示しており、働かずに家にいることで、乳幼児を持つ母親として子どもに十分な時間をかけることができていることがこのような結果につながっていると考えられる。

ライフコースⅣ(結婚退職→出産後再就職コース、N=79)では、パート・アルバイトの割合が高く、仕事満足度と選択Ⅲ(結婚後働くかどうか)で働かないという選択をしたことへの満足度との間で正の相関がみられた。現在の仕事に満足していない人は、結婚退職にも満足していないことが示され、正規社員としての再就職を望む人が多い中、それが困難であると示されているように(徳永, 2006)、仕方なく退職し、望んでいない就職先に再就職している女性がいることが考えられる。

ライフコースⅤ(結婚退職→専業主婦コース、N=62)では、母親としての満足度と経済状況満足度との間に正の相関がみられた。経済的な心配をすることなく、子育てに集中できることが母親としての満足度と関連していることが考えられる。

各ライフコースと主観的幸福感との差の検討

目的2に沿ってライフコースを独立変数、主観

的幸福感を従属変数とした一元配置分散分析を行った。

その結果、ライフコースⅣの人たちはライフコースⅠの人たちと比べて主観的幸福感が有意に低かった。育児と就業両方に従事しているにもかかわらず、主観的幸福感が低いということは、これまでの先行研究とは異なる結果であった。そこから働くことそのものよりもむしろ、働く理由が育児期の女性にとって幸福感に影響がある可能性が示唆された。

思い描いていたライフコースと実際のライフコースとの違いが主観的幸福感に与える影響の検討

第3の目的として、思い描いていたライフコースと実際のライフコースの一致・不一致が主観的幸福感に影響があるかを検討した。その結果、一致群の方が、主観的幸福感が有意に高かった。

その後、選択Ⅴ(出産後働くかどうか)での不一致が見られた人を対象に、＜望んでいた・満足している＞＜望んでいた・満足していない＞＜望んでいなかった・満足している＞＜望んでいなかった・満足していない＞の4群に分け、主観的幸福感に差があるかを検討した。その結果、＜望んでいなかった・満足している＞群が＜望んでいた・満足していない＞群よりも主観的幸福感が有意に高かった。このことから、望んで選択したかということよりも、今その選択に満足できているということが主観的幸福感と関連があることが明らかとなった。

総合考察

今回の研究では、育児期にある成人女性のライフコースを、女性が選択を求められるポイントをつなぐ流れとして捉えて検討したことで、ライフコースのよりリアルな把握ができた。

また本研究では、ライフコースⅣ(結婚退職→出産後再就職コース)というライフコースを選択してきた女性が、経済状況満足度や主観的幸福感が低いという結果が得られ、「働いている＝幸福感が高い」という従来の知見とは異なる結果となっている。よって、成人女性の就労をめぐることは、その動機なども含め、今後、丁寧に見つめていくことが必要である。

臨床心理学的意義 育児期の女性へ支援をする際、女性がどのようなライフコースをどのように選択し、現在どのような状態にあるのかという、女性の生涯を見通した支援の必要性が示唆された。